



TITLE:

コンタクト・ゾーンにおける実践：
ニュージーランド・マオリのタト
ウー「モコ」と世界の「Tattoo」

AUTHOR(S):

秦, 玲子

CITATION:

秦, 玲子. コンタクト・ゾーンにおける実践：ニュージーランド・マオ
リのタトウー「モコ」と世界の「Tattoo」. コンタクト・ゾーン 2012,
5: 108-123

ISSUE DATE:

2012-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177254>

RIGHT:

コンタクト・ゾーンにおける実践

——ニュージーランド・マオリのタトゥー「モコ」と世界の「Tattoo」

秦 玲 子

1 はじめに

1-1 本論の目的

本論の目的は、現在復興されているニュージーランド・マオリ（以下、マオリ）の伝統的タトゥー、モコの実践を、コンタクト・ゾーンという観点から考察することにある。

マオリの人々は、1960～70年代の文化復興運動を経て多くの文化実践を復興させてきた。モコも20世紀半ばに一時断絶、1980～90年代からの人々の努力により復興された〔秦2011〕。モコは現在ではマオリ文化として広く認められ、ますます多くの人々がモコをまわっている。そこでは、ギャングのタトゥーやグローバルな広がりを持つタトゥーは、しばしばTattooと呼ばれ、モコとは明確に区別して語られる。

しかし同時に、モコはTattooと様々な場で接触し、その接触の中で常に変化してきた。モコの彫師たちは世界中のタトゥー・イベントに出かけ、様々なタトゥーを目にし、友人を得てその技術を学んでいる。また、ニュージーランド国内にも様々なタトゥーが存在する。こうした現在の接触に加え、復興の過程においても、彫師たちはTattooの技術を積極的に取り入れてきた。その結果、モコを彫る彫師たちの間でも多様な実践が存在している。本論では、接触する中で変化してきたモコの実践を①施術部位、②道具、③技術とデザイン、④行われる場、の4点から整理する。さらに、モコを彫る彫師たちの経歴と世代によって、その実践には現在3つの傾向があることを指摘する。

Mary Louise Pratt [1992] は、コンタクト・ゾーンという概念を「まったく異なる文化が出会い、衝突し、格闘する」〔Pratt 1992:4〕社会空間として定義した。それは「地理的にも歴史的にも分離していた人びとが接触し、継続した関係を確立する」〔Pratt 1992:7〕空間であり、そこには多くの場合、支配と従属という非対称がある。彼女の中心的興味は、コンタクト・ゾーンにおける相互交渉を通じて、支配者（ヨーロッパ）がいかに他（非ヨーロッパ）を表象し、他を表象することによっていかに自己像を作り出すのか、また被支配者が支配者の言説を取り入れながらいかに自己を表象するのかにあった。それは、田中雅一〔2007〕の議論を借りれば、「われわれ」が他者と出会うコンタクト・ゾーンにおいて、「かれら」を想像することにより、いかに「われわれ」は「われわれ」自身を想像しているのかを問う議論であった。また、そこでは「かれら」は「自己民族

誌」という形で「われわれ」を模倣しながら、「かれら」自身を想像している。この行為は、「われわれ」による「かれら」の想像への対抗であり、「かれら」は「われわれ」が「かれら」を想像するのと同じように、「かれら」にとっての他者である「われわれ」を想像し、また「かれら」自身を想像しているのである。

田中〔2007〕は、Pratt の議論を概説するとともに、彼女の想定していた植民地—被植民地関係から対象を拡大、さらにスケイプ論や想像の議論を参照することで発展させた。これによって、Pratt の視点を継続しながら、現代社会の様々な出会いと接触を考察することが可能になった。

本論文では、Pratt と田中の定義したコンタクト・ゾーンという概念を分析の中心に置く一方、これまで想定されてきた支配と従属という関係を前面に押し出すことなく、モコと Tattoo の接触を考察する。また、これまでの議論の中心的関心であった表象もしくは想像といったものから、実践へと視点を移すこととする。

18世紀以降のヨーロッパ人とマオリとの接触、第二次世界大戦後のマオリの都市移住は、モコ、そしてマオリ社会に大きな変化をもたらした。この出会いは、Pratt の論じたように「強要、根本的な不平等、そして手に負えない葛藤」〔Pratt 1992:4〕を含むものであった。この接触の中でマオリの人々は、教育程度が低く英語力が劣っている、酒や煙草に溺れ、不健康である、一箇所に落ち着かない、時間や規則を守らない、ずる休みをする、無駄遣いをする、結婚生活が不安定である、非行や犯罪が多い、ギャング団が横行しているなどの負のイメージを負わされたのである〔内藤 1999〕。モコもまたギャングや非行と結びつくものとして否定され、マオリ文化という文脈から引き離されていった。1980～90年代以降のモコ復興は、失われた技術や知識を取り戻すというだけでなく、非マオリのタトゥー実践を Tattoo として想像し、それに相對するものとしてモコを再主張していく過程であった。こうして見たとき、これまでのコンタクト・ゾーンの議論でなされてきた表象や想像の議論は、たしかにここでも当てはまるように思える。

しかし、表象から目を離し、実践に目を映してみたとき、そこには「モコ」と「Tattoo」という二重化された想像だけでは説明できない、多様な実践が存在する。モコは今、自己の作り出した他者、そして自己への想像といかに向き合っているのか。そして、そのしばしば固定化される想像と交渉する中で、モコは今いかに実践されているのか。これまで議論されてきた表象から離れ、実践へと目を映すことで、単に異なるものが共存するというだけでなく、「どちらにも簡単に区分できない雑多な人びとが共存」〔田中 2007:32〕する場としてのコンタクト・ゾーンを、より鮮明にまなざすことが可能になるのである。

1-2 調査地の概要と調査対象

本研究は、2009年9月～11月の予備調査に加え、2010年2月～3月、6月～9月、11月～12月の、のべ3回、128日間のフィールド・ワークに基づいている。調査地は、ニュージーランド国内すべてとしたが、主に北島で行った。

ニュージーランドは、27万534平方キロメートル（日本の約4分の3）の国土面積を持ち、²⁾2006年時点での人口は418万4,600人（2005年の北海道の人口562万737人を下回る³⁾）、

そのうち、マオリ人口は62万4,300人で約14.9%を占めている。他のエスニシティでは、中近東が約0.92%、パシフィック・アイランダーが約7.2%、アジア人が約9.7%、ヨーロッパ系その他が約76.8%となり、極めて多様なエスニシティが共在していることが明らかである。また、マオリのうち約87%が北島に居住している⁴⁾。

モコを考える場合には、歴史的に与えられてきた特別な位置づけから、顔へのモコ（男性の場合は顔全体に行うモコ・カノヒ、女性の場合は顎に行うモコ・カウアエ）にのみ注目するという選択肢も存在した。実際に、先行研究で大きくクローズアップされてきたのは顔へのモコである。しかし、本稿では顔という特別な位置づけを認識しつつも、対象を顔以外のモコを含むモコ全体とした。人々にとって、顔のモコも顔以外のモコも重要な意味を持っていると考えたからである。ただし、顔に注目した資料が多いことから、特に断絶以前の実践について論じる場合には顔への記述が主となっている。

1-3 用語の整理と人名、マオリ語の表記について

本論文では「皮膚に傷を入れて色素などを注入し、文様や文字を定着させる身体加工」〔田川 2009:173〕一般を「タトゥー」と記し、タトゥーを施す人々を「彫師」とした。また、タトゥーを、以下の3つにわけて捉える。まず、モコである。「モコ」が何かとはしばしば論争となる事柄だが、ここでは広く人々によって「モコ」と呼ばれているものを「モコ」と呼ぶ。モコを彫ることが「タ・モコ」である⁵⁾。次に、世界的に広がるタトゥーを、「グローバル・タトゥー」とする。最後に、犯罪者やギャング、売春婦といった人々が実践してきたタトゥーである。人々は、「マオリのモコ」とは対置する形で、グローバル・タトゥーや犯罪者やギャング、売春婦のタトゥーを「Tattoo」と呼ぶことがある。これらは相互に影響を与え合っており、厳密な定義や区別が困難である。そのため、あくまでも人々の言説に基づいたものとして使用するものであり、筆者の判断による区別ではないことを強調しておきたい。

マオリ語については、論文中ではカタカナ表記としたが、長母音と短母音は区別していない。ただし、文献名に関しては、その文献に従った。インフォーマントの名前は、基本的には本名もしくはニックネームで表記した。インフォーマントの語りを引用する際には、名前と調査の日付を括弧に入れて示しているが、一部匿名とした場合もある。

2 「モコ」の復興

ここではまず、モコの施術技術に焦点を当てながら、モコの断絶から復興へ至る歴史を概説する。さらに、復興の結果、モコがいかに「Tattoo」と異なるものとして語られるかを明らかにする。

2-1 モコの断絶と復興

モコは18世紀のヨーロッパ人との接触以前から行われていた。施術道具はアホウドリの骨などで造られた刃を木製の柄に取り付けたタトゥー鑿（ウヒ）であり、鋸歯状の歯を持

つものと滑らかな刃を持つものとに大別できる。顔への施術の場合、滑らかな刃で切り込みを入れた後に別のタトゥー鑿で顔料を入れるため、モコは凹凸のある、三次元的な仕上がりのものとなった。色は黒もしくは青味がかった黒である。モコの施術部位は、顔のほか、肩や腕、胸、首、背中、足などである。性器へのタトゥーは男女ともに行われることがあった。特に重要な意味を持っていたと考えられるのは、男性の場合、顔全体に行われるモコ・カノヒと、ウエストから臀部、足の付け根を覆うプホロである。また、女性の場合には顎に入れるモコ・カウアエが重要とされる。

モコは、18世紀、接触の最初期からヨーロッパ人航海者、捕鯨者らの注意を引くこととなった。モコは、醜く、恐ろしく、そして美しいものとして航海者・捕鯨者らを魅了したのである [Nikora, Rua & Te Awakotuku 2005]。中には、自らモコを入れ、マオリの妻を得るものもいた。このヨーロッパ人との接触はモコに大きな変化を引き起こした。最初の大きな変化は、金属の導入である。金属製の刃を持つタトゥー鑿が現れ、より細かく、シャープな線を描くことが可能になった。また、ヨーロッパ人との接触を通じて、例えば銃などのヨーロッパ的デザインが身体に彫られるようになった。

接触の最初期に捕鯨者や航海者を魅了したモコは、しかし、後にやってきた宣教師たちには野蛮な習慣として否定され、移民の増加、マオリの周縁化の中で衰退していく。1840年のワイタング条約によるニュージーランド建国後、1860年代のマオリ土地戦争において反政府マオリ軍がイギリス植民地政府・親政府マオリ軍に敗れると、1865年に施術したという記録を最後に男性の顔へのモコ・カノヒが断絶する。

男性の顔へのモコ・カノヒが断絶したことにより、次の大きな変化が起こった。男性の顔全体への施術から女性の顎のみへの施術となったことで、技術が失われていく。タトゥー鑿の種類が減少し、デザインの多様性も失われていった。

その後、第一次世界大戦ごろには、女性の顎へのタトゥー技術に大きな変化が起こる。タトゥー鑿を用いず、縫い針を束ね柄に結び付けて施術が行われるようになったのだ。これにより、速く衛生的な施術が可能になった。肌の組織を壊さずにパターンを入れるため、デザインは三次元的なものから二次元的なものへと変化した。写真家 Marti Friedlander の写真を用いながら断絶前のモコを論じた Michael King は、このころデザインの数が極端に減り、ステレオタイプ的なデザインが増えたことを指摘している [King & Friedlander 2008 (1972)]。またモコの社会的な位置づけにも変化が現れた。それまでは若い女性の美しさの象徴であったモコ・カウアエが、年長の女性としての地位を示すものとなっていく。さらに、伝統的には男性のみとされていた彫師であるが、このころには女性の彫師も存在した。

第二次世界大戦は、マオリ社会に決定的な変化をもたらした [King & Friedlander 2008 (1972); 伊藤 2007]。第二次世界大戦下およびその後の経済復興の中で、政府が地方のマオリに都市での就労を推奨、多くのマオリが都市に移動したのである。都市マオリが急速に増加する一方、地方のマオリ・コミュニティは衰退する。こうしたマオリ社会の大きな変動の中、女性の顎に行われるモコ・カウアエも断絶する。記録されている最後の施術は1953年である [King & Friedlander 2008 (1972)]。

断絶したモコは、1960年代から高まりを見せる文化復興運動の中、1980年代、四半世紀の時を経て復興される。詳細は拙論〔秦 2011〕に詳しいが、断絶後、タトゥー実践はギャングやマオリ活動家と結びつき、またヨーロッパ系やマオリなどを含むグローバル・タトゥー出身の彫師に担われていた。しかし、1980年代末、90年前後に木彫や視覚芸術を行うマオリ芸術家たちが参入、かれらの活動によって「マオリ文化」として肯定されるものとなった。2000年代にはモコ復興はさらなる加速を見せ、2004年と2010年には国立博物館で文化的なタトゥーをテーマにイベントが行われている〔秦 2010〕。マオリ芸術家出身の彫師たちは、精力的な文化運動を通してギャングのタトゥー実践やグローバル・タトゥーから「モコ」を引きはがし、その周縁性を除いていったのである。

2-2 「モコ」と「Tattoo」

復興の結果、モコはマオリ文化としての地位を確立しつつある。そこでは、ギャングのタトゥーやグローバル・タトゥーはしばしば Tattoo と呼ばれ、モコとは明確に異なるものとして語られる。そこで顕著なのは、Tattoo は商業的であり、ファッション、飾りにすぎず意味を持たないが、モコは意味を持つという語りである。そして、その意味は、モコをまとう人間のファカパパ（系譜、祖先とのつながり）を通じてもたらされるとされる。

以下は、翌年に開かれるモコについてのワナンガ（学びの場）について書かれた、2002年の雑誌 *Pikiao Pānui* の記事の一部である。

「これ〔このワナンガ〕は、tattoo 対モコ、そしてモコ対 tattoo についてであり、教育を通じて、コミュニティの〔モコへの〕態度は変わるだろう」と Tui〔主催者〕は語った。（中略）「11歳から19歳ごろの若者たちは、ホーム・メイド・ガン（手作りのガン）に手を出したり、そうしたものに近いところにいたりする。しかしホーム・メイド・ガンは危険で、不健康で無知である。こうした若者たちのリスクをターゲットにした「タ・モコ・ファカイロ⁶⁾」の教育ワナンガを行うことが目的である。」（中略）Tui は、タ・モコ・ファカイロは、異なるタトゥーのプロセスを提供すると語る。タ・モコのパターンが持つカウパパ（目的）や部族的なデザイン、歴史、ファカパパ（系譜）を学び理解することによって〔若者とコミュニティは〕変化する〔Anon. 2002〕（〔 〕内は引用者による補足。以下同様）。

また、彫師たちは以下のようにモコと Tattoo の違いを語る。

「モコと Tattoo は」完全に違う。俺たちにとって、Tattoo とモコの違いの主要素は、（中略）モコはその人物の〔肌の〕上に刻まれた、生活、生き方だということ。それに、系譜、俺たち〔マオリ〕にとっての「ファカパパ」（系譜）という点でもモコは Tattoo と異なる。モコは何かを〔祖先から〕受け継いでいなくてはならない。ファカパパがモコを作る。系譜、それをまとう人物の系譜が。命 life force、生き方がそこにあるから。Tattooing は、T シャツを着るようなもんだ。ただかっこいいだ

け。ストーリーを語らない。俺たちは、Tattoo にはマウリ（命、生のエッセンス）が入ってないと言う。これが俺にとっての大きな違いだ。つまり、モコは生活であり、家系、系譜、ファカパパを持つ。Tattoo は美しくなるために、ただ肌に刻むものだ（Q 2010. 11. 26）。

この「モコという独自の」言語は、一つ一つのものが意味を持っている。（中略）デザインが物語を語るの。身体、物質的な意味での身体によって、マオリ世界全体とあなたとの関係を作る。あなたの存在を作ったもの、あなた以前のすでに亡くなった人々や、彫刻、編み物「といったマオリ芸術・文化」と、あなたをつなぐ。

「モコの場合には」人々は「これがデザインだから入れて」と言うわけじゃない。Tattoo shop で起きるのはそういうこと。Tattoo shop では、「私は花が好きだから、それを入れてくれる？」みたいに。わかる？ プロセスなの。「Tattoo」アーティストは、こういう意味では道具を持っている人というだけ。かれらは素晴らしい描き手だし、どうやって肌に入れるかを知っている。でもかれらは、意味を込めることはしない。図柄がそこにあって、もしくは図柄を描いて、ただそれを入れるだけ。マオリにとっては、「タ・モコは」象徴的な言語なのよ（Julie 2010. 06. 21）。

モコ復興の過程は、失われた技術や文様の意味を研究し、取り戻すというだけでなく、ギャングのタトゥーやグローバル・タトゥーを Tattoo と位置づけ、モコをそれとは異なるものとして主張していく過程であったのである。

3 接触する「モコ」と「Tattoo」

3-1 モコの実践

前節で明らかにしたように、モコと Tattoo は区別され、Tattoo はしばしば否定的に言及される。しかし一方、ニュージーランドで、また世界的なタトゥー文化の広がりの中で、モコと Tattoo は常に接触している。復興の中、彫師たちは積極的にグローバル・タトゥーの技術を取り入れた。また、彫師たちの中には、海外のタトゥー・コンベンション⁷⁾に参加し、友人を得て Tattoo から技術を学ぶ者もいる。

こうした Tattoo との接触の中で、現在、彫師たちはいかにモコを実践しているのだろうか。ここでは、復興の中でモコがグローバル・タトゥーから取り入れた要素に注目し、現在行われているモコの実践を、施術部位、道具、技術とデザイン、行われる場、の4点から整理する。

3-1-1 施術部位

モコを入れる部位として一般的なのは、四肢、背中、耳の後ろである。男性の場合には肩、女性の場合には腰が非常に人気があり、痛みが少ないためか、最初に入れるならここを勧めると言う彫師もいた。また、特にマオリの文化的な実践として特別な意味を付与さ

れているのが、男性の場合、顔全体に行われるモコ・カノヒと、ウエストから臀部、足の付け根を覆うプホロである。女性の場合には顎に入れるモコ・カウアエの重要性が強調される。こうした「重要な」モコを入れる際には、酒やドラッグをやめるべきである、マオリ語に堪能であるべきである、といった言説がある。

【事例1】テレビ番組

顔にモコを入れる夫婦のドキュメンタリーである *About Face*⁸⁾ のナレーションは、モコについての言説の典型である。明日モコを彫るという場面で、ナレーションは言う。「お酒はやめ、ドラッグもない。人生が変わる (No Alcohol, No Drugs. The change of life.)」。

【事例2】「人前ではお酒を飲まない」

ある彫師の妻は、モコ・カウアエ〔女性の顎にするモコ〕をまとう自身の母について以下のように語った。

お酒を〔人前で〕飲まない。もしバーで、酔っ払っている人がカウアエをしていたら？ 人々がどう思う？

こうした顔などの「重要な」モコと比べて、腕や腰などのモコはより多くの人が入れているのを見ることができる。1990年代初期には上腕を一周するアーム・バンドなど小さなマオリ模様の人気が高かったが、復興が進むにつれ、目につかない場所から目に見える場所へ、小さいモコから大きなモコへと施術部位や範囲が変化した。ある彫師は、復興の進展に伴う変化を以下のように語っている。

最初、私たちが初めてモコを始めたころ、人々はアーム・バンドをほしがった。だけど今は、顔や顎、足……わかる？ とても重要なモコ (Julie 2010. 06. 21)。

3-1-2 道具

現在、モコの施術にはグローバル・タトゥーで一般的なタトゥー・ガン⁹⁾ (写真1) が多く使用される。タトゥー・ガンの場合、デザインはペンで描くようにして刻まれることになる。そのため、タトゥー鑿で刻み目を入れた場合のような凸凹はできず、仕上がりは二次元的となる。サモアやハワイの彫師の技術に学び、伝統的なタトゥー鑿¹⁰⁾を復活させようという動きも見られる (写真2, 3) が、主流はタトゥー・ガンとインクなど、グローバル・タトゥーから取り入れた技術である。

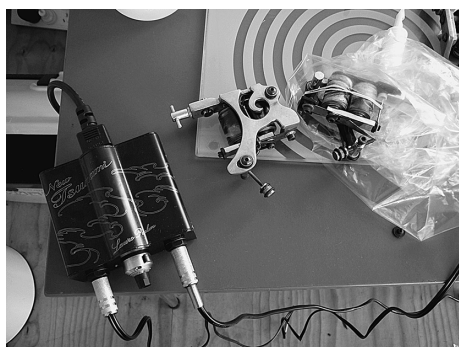


写真1 タトゥー・ガン (2010. 02. 09 Boydie)

なぜ、彫師たちはタトゥー・ガンやインクな

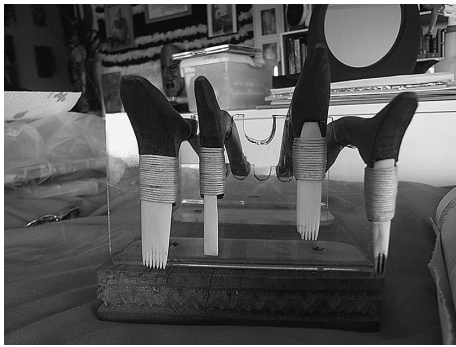


写真2 復興されたウヒ① (2010. 11. 17 Kura)



写真3 復興されたウヒ② (2010. 11. 17 Kura)

どグローバル・タトゥーの技術を取り入れたのだろうか。これは、その簡便さに加えて、こうした技術が美しく衛生的な施術を可能にするためであったと考えられる。

モコ以前にグローバル・タトゥーを行っていた彫師や、ギャング出身の彫師の場合には、ホーム・メイド・ガンからグローバル・タトゥーのタトゥー・ガンへの移行は、「プロ」の彫師となることであり、芸術家としてのかれらの技術の向上であった。グローバル・タトゥーやギャング出身の彫師たちは、グローバルな世界に積極的にアクセスすることで、モコを美しく磨いてきたのである。また、1990年代前後に現れたマオリ芸術家出身の彫師たちの場合、タトゥー・ガンという技術の取り入れは、ギャングの「不衛生」で「美しくない」タトゥーとの差異化を図る行為であった。

桑原牧子は、タヒチのタトゥーについて論じる中で、タトゥーの美しさと社会的な受け入れの相関について次のように言及している。

多くのタヒチアンは美と道德のつながりを信じている。つまり「醜い」タトゥーは「悪く」、 「美しい」タトゥーは「良い」とみなしているのである。そこでは「悪い」タトゥーをしているのは犯罪者や反社会的な人々であり、「良い」タトゥーをしているのは歴史や古い実践についての深い知識を持っている人である [Kuwahara 2005: 217]。

このようなモラルと美のつながりは、ニュージーランドでもしばしば観察された。特に美しいモコと対置されるのは、ギャングや犯罪者のタトゥーである。復興の過程で彫師たちは、モコに独自の意味を込め、独自のパターンを使用するとともに、タトゥー・ガンという技術を取り入れ、モコを美しく磨きあげる中で、美しいマオリ文化としてのモコを主流社会に認めさせてきたのである。そのために、グローバル・タトゥーからの技術の取り入れは不可欠であった。

このように、衛生的で美しいモコを生み出すことは、かれらの美意識にかなう作品を作り上げるため、また、ギャングや犯罪者のマージナルなタトゥーから自身のタトゥーを引き離すために必要であった。それは、ギャングや刑務所といった周縁的な「Tattoo」と「マオリのモコ」を差異化し、さらに言えば、肯定的なモコのイメージを主流社会に受け入れさせることともつながっていたと考えられる。



写真4 下絵。Inia Taylor から Iain へのモコ (2010.09.09)。まず、ペンを使用してデザインが描かれる。シェイディングも使用されている。

3-1-3 技術とデザイン

多くの彫師は、ガンで施術する前に2色か3色のペンを使ってデザインを身体に直接描く(写真4)。その際には、まず全体の形を大まかに描いた後、異なる色で補正したり、さらにデザインを書き込んだりする。ただし、細かなパターンはペンで書き込むことなく、直接タトゥー・ガンで刻むことが一般的である。施術の間、血を拭う際にペンで描いた文様が消えてしまうことはままあり、必要に応じてペンで書き込みが行われる。

カーボン紙を使用して、あらかじめ紙に描いたデザインを身体に移す、ステンシルの技術¹¹⁾は、モコではあまり用いられない。これは、デザインの個別性が重視されることに加え、曲線を基本とするモコのデザインは、フリーハンドで身体部位に合わせて描いた方が簡便であるからと思われる。ただし、スタジオを持つ彫師の場合、ステンシルを比較的多く用いる傾向があると言えるかもしれない。かれらがグローバル・タトゥーの技術に通じているためであろう。ステンシルの技術は、同じデザインを何度も描くことを可能にするだけでなく、大きな作品を彫る際にデザインを描く時間を短縮する。

タトゥー・ガンとともに、グローバル・タトゥーから、カラーの技術やシェイディング(ぼかし、影つけ)の技術も取り入れられた。黒のみを使い、肌の色と黒の対比のみで表現されていたモコであったが、影をつけることでより立体的に見せたり、色をつけたりすることが可能になった。ただし、こうしたカラーやシェイディングを行うことに否定的な彫師もいる。また、カラーの場合には、赤や青といった色を1色か2色のみ、黒とともに用いることを好む彫師も多い。

使用されるパターンは、ある程度の共通性があるものの、彫師によって独自のパターンを持っていたり、パターンの名称や意味が異なったりする。顕著なのは、現在、多くの新しいパターンが取り入れられていることである。まず、木彫を始めとして、他のマオリ芸術から多くのパターンが取り入れられた。特に部族特有のデザインは木彫、祖先像から取り入れられた。さらに、多くの具象的なデザインも使用される。その際には抽象的なパ

ターンに限らず様々なものを象った文様が使われるため(写真5)、デザインの自由度は大幅に広がる。モコのパターン、デザインはアーティストによって多様な幅を持ち、それぞれの彫師がそれぞれの美意識を反映した作品を作り出している。新しい技術を駆使し、彫師たちは、独自のスタイルを模索し、自己の美意識にかなう作品を生み出しているのである。

3-1-4 行われる場

タトゥーをする場としては、タトゥー・スタジオとタトゥー・コンベンションのほか、マラエ（集会所）や家が主なものとしてあげられる。特にスタジオとコンベンションはグローバル・タトゥーで一般的である。スタジオを所有し、コンベンションに参加することは、グローバル・タトゥー出身の彫師たちにとってはごく自然な実践である。タトゥーを職業とし、彫師として生活の糧を得るためには日々多くの施術を行う必要があり、仕事場としてスタジオを持つ者が多い。また、タトゥー・コンベンションは世界中のアーティストと出会い、自身の技術を高める機会となる。しかし、スタジオの所有やタトゥー・コンベンションへの参加は、復興を主導したとされる、主にマオリ芸術家出身の彫師たちの一部からは商業的とされ、拒否感を示されることがある。こうした彫師たちは主に集会所や家において施術を行っている。復興期には、集会所に出かけ、人々にモコについて話すとともに施術をする、ワナンガ（学びの場）が開かれた。

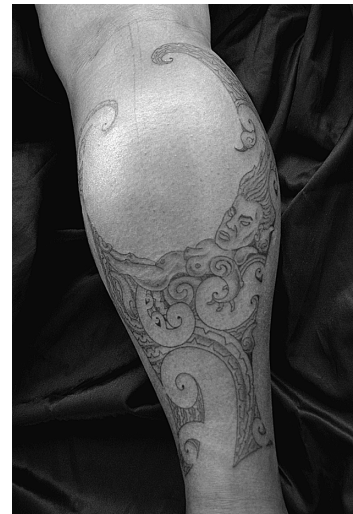


写真5 モコのデザイン。Tane から Darin へのモコ（2010.02.27）。現在では抽象的なパターンのみでなく、様々なものを象った文様が使用される。

3-1-5 小結

「復興」の中では、衛生的で美しいモコを生み出すため、また自身の技術を高め、彫師として生きていくために、様々な要素がグローバル・タトゥーから取り入れられた。彫師たちは、マオリの「モコ」の実践が断絶前と異なることに無自覚なわけではない。こうした変化を肯定するのは、マオリは様々なものを取り入れることに長けており、祖先もそうであったという言説である。グローバル・タトゥーの技術を取り入れ、かれらが発展させてきたものは決して「Tattoo」ではなく、「モコ」なのである。

「〔昔は〕こうだった、これが伝統だからそうあり続けなくてはいけない」ということではない。マオリの人々の素晴らしいところは、環境によって変化し続けてきたということだ。アジアから、太平洋へ、環境に応じて変化してきた。伝統も順応し、発展してきたんだ。（中略）だから、俺たちはあらゆるものに順応できる。この近代的な環境にも、伝統的な環境にも。（中略）マオリ文化は、ある特定のスタイルじゃないと思う。（中略）それは発展し続けるんだ（Te Rangitu 2010.06.19）。

3-2 多様な実践

現在、ニュージーランドにおけるモコの実践は非常に多様であり、彫師はそれぞれ独自のこだわりを持っている。それぞれの美意識によってモコのデザインは異なり、独自のパターンを持っていたり、パターンに独自の意味を付与したりする場合もある。ここでは、さらに多様な実践があることを認識しつつ、彫師たちに見られる3つの傾向を整理する。

3-2-1 「Tā Moko Artist」と「Tattooist」——経歴と実践の差異

特に高齢の彫師たちの場合、彫師たちの実践は2つの傾向で捉えることができる。

その傾向の差は、以下の5つの項目で整理できる。

- ①スタジオを持つ／持たない
- ②経歴の違い（ギャング、グローバル・タトゥー／マオリ芸術家）
- ③スタイルの違い（様々なスタイルを行う／モコというスタイルへのこだわり）
- ④タトゥー・コンベンションに参加する／あまり参加しない
- ⑤海外でも活躍／国内で有名

スタジオを持つ彫師の場合には、グローバル・タトゥーやギャングの出身であることが多く、そうした彫師の場合には、モコ以外にも、ジャパニーズ・スタイルや西洋的なスタイル、他の太平洋のスタイルを行う場合が多い。一方、スタジオを持たない彫師の場合、主に家もしくはマラエ（集会所）で施術を行う。こうした彫師は、木彫などのマオリ芸術家出身の場合が多く、モコ以外のタトゥー・スタイルは行わないことが多い。

なお、スタジオを持つ場合と、家やマラエでタ・モコを行う場合には、客層や客との関係性に違いができる。つまり、スタジオの場合、客はふらっとやってくる場合が多く、施術が終わると短時間で帰っていく。一方、家やマラエの場合、客は友人や親戚であることが多く、そうでない場合にも、彫師と客の間にはより親密な関係が作られる場合が多い。さらに、スタジオを持つ彫師の場合、多くの場合タトゥーでのみ生計を立てるため、より多くのタトゥーを行う。一方、スタジオを持たない彫師の場合、他のマオリ芸術など他の職業でも収入を得ている場合が多い。そのため施術を毎日行うわけではなく、何カ月も行わないという場合もある。

以下は、先に述べた実践の差を端的に示すと思われる Julie と Kura の事例である。

【事例3】Julie ——スタジオを持たない／Visual Artist／モコへのこだわり

45歳女性。白人の母とマオリの父を持つが、父とは幼いころに死別。人類学や美術を大学で学び、マオリ視覚芸術 Maori Visual Art で修士号を持つ。大学や中・高校で美術教育に関わっていたが、現在は家にある仕事場で自らの創作・研究活動に従事している。1996年ごろから本格的にモコを開始、女性としては復興初期から活躍していた有名な彫師である。

「私は、人々が真剣に、ここから（seriously, and honestly）、「モコやタ・モコ

がまったく混じり気のないもの（pure）だ」とは思っていないと思う。つまり、Tattoo はモコに影響を与えてきた。それっていいこと。私は、どのモコ・アーティストも、完全に私たちの伝統を行っているとは言えないと思う」（2010.06.21）と語る一方、彼女にとって「モコ」とそれ以外の「Tattoo」は厳然と区別されている。芸術は言語であるというのが彼女の考えであり、他の要素を「混ぜるのは好まない」「[シェイディングを] 使いすぎると Tattoo のように見える」とグローバル・タトゥーから導入された技術であるシェイディングを行わず、主に線でデザインを作り上げる。カラーもほとんど使用しない。

モコのほか、洋服やアクセサリーのデザイン、コンテンポラリー・アートの制作を行っており、最近マオリ芸術を体系的に扱った著書を出版。現在の研究は「Contemporary Tā Moko Artist の役割」についてであり、博士論文の執筆中。強く知的な女性であり、2児の母としての教育ママの一面も持っている。夫も著名なアーティストである。

【事例 4】Kura ——スタジオを持つ／ギャングとグローバル・タトゥー／様々なスタイル／コンベンションに参加

50歳男性。タウポの町でタトゥー・スタジオを所有する彫師。若いころは H'way 61 というギャングのボスだったといい、1970年代、80年代、90年代に刑務所に入っていた。刑務所で受刑者仲間タトゥーをしていたらしい。ヨーロッパなどで長い間タトゥー修業をしていた経験を持ち、現在でも多くのタトゥー・コンベンションに参加。カラーやシェイディングなど高度な技術を持ち、他の彫師が学びたいというほどである。

「外側は強く見えても、内は強くないやつもいる。それは血筋なんだ」と自分の血筋をさかんに主張し、またモコに強いこだわりを見せる一方、自分は「好きだから」カラーのスタイルもするし、ドクロも彫ると言う。特にジャパニーズ・スタイルを好む。

現在はギャングのメンバーではないが、交友関係にはギャングの関係者も多く含まれている。誰の前でも自分の意見をはっきりと述べるような強さを持つ半面、気分屋でプライドが高くどこか孤独さを感じさせる人物である。多くの子を持ち、末の4歳の娘を溺愛している。

3-2-2 「Tā Moko Artist」による差異化と「Tattooist」の誇り

モコの実践にこのような傾向の差が明らかである中で、グローバル・タトゥーやギャング出身の、スタジオを持ち、モコ以外のスタイルを行う彫師たちは、たとえ1980年代以前からタトゥー実践を行っていたとしても、復興を行った彫師として名をあげられることは少ない。復興を主導してきたとされるのは主に、スタジオを持たず、モコのみを行うマオリ芸術家出身の彫師たちである。

「あなたが言っている彫師の中には私たちがただの Tattooist だと思っている人も含ま

れている」(Julie2010.08.09)という言葉に明らかなように、復興を主導してきたとされる彫師たちは、自らを「Tā Moko Artist」と呼び、「Tattooist」と区別しようとする場合がある。Tattooistとは、先にあげた、スタジオを持ち、モコ以外のスタイルを行う傾向の強い彫師たちをさす。例えば Julie は、「商業的 Commercial かどうか、〔Tattooist と自分たち Tā Moko Artist の〕もっとも大きな違いだ」(2010.08.09)と述べた。モコをギャングや刑務所文化から引きはがし、マオリにもパケハにも肯定される「マオリ文化」としてきたかれら Tā Moko Artist にとって、スタジオを所有し(商業的)、グローバル・タトゥーとより近い位置にあり、様々なスタイルを行う、ギャングなどの経歴を持つ彫師は、パケハの Tattoo を行う「Tattooist」なのである。

一方、Tā Moko Artist たちが言う Tattooist¹⁴⁾たちも、自らの行う「モコ」と他のスタイルは明確に区別している。かれらにとって、それは間違いなくマオリの「モコ」である。また、Tattooist たちは、Tā Moko Artist たちとは異なる誇りを持っている。かれらは、「俺が始めたころは誰もモコをやっていなかった」と、より早い段階から実践を行い、モコ復興の礎を作ってきたことについての誇りを語る。また、かれらは自らの高い技術に誇りを持っている。ある彫師は、国内で有名な彫師たち〔Tā Moko Artist たち〕について「かれらの作品を見たことがあるか?〔一人の作品を除いて〕くそ Bullshit だ」「ニュージーランドでは有名だが、海外では誰も認められていない」(2010.08.03)と筆者に語った。たしかに、Tattooist たちの仕事は速く、より「プロフェッショナル」であると言えるかもしれない。スタジオを持つ彫師は、タトゥーのみで生計を立てている場合が多い。そのため、日々こなすタトゥーの量は、スタジオを持たない彫師とは比べ物にならない。そのため、施術は比較的早く、さらに国内外で多くの経験を積んでいるため、カラーやシェイディングなど、様々な技術を持っているのである。¹⁵⁾

3-2-3 軽やかな若者たち

このように見られる実践の差であるが、若い世代になると、その差はあいまいになる。¹⁶⁾ 著者の調査に協力してくれた若い彫師たちの多くは、マオリ芸術家の出身であった。しかし、かれらの中には、スタジオを持つ者が多くあり、また、スタジオでタトゥーをすることに対する抵抗感もあまり感じられない場合が多い。若者たちは、柔軟に、自らの方法を模索し、その実践は多様化している。若者たちの中には、グローバル・タトゥーのシェイディングやカラーといった技術への興味から、高度な技術を持つ、グローバル・タトゥー出身の彫師たちへ接近しようとする動きが見られる場合がある。また、タトゥー・コンベンションへの参加も、積極的に行われることがある。

【事例5】Tane と Clifford

Tane と Clifford はそれぞれマオリ芸術の教育をうけた若い彫師である。しかし、二人とも最近 Tattooist へ接近している。Tane はスタジオを持つ彫師の家を数日間訪れ、Clifford はスタジオで働き始めた。滞在中、Tane は彫師とタトゥーや彫刻の技術についてさかんに言葉を交わし、他の彫師の噂話やモコに関する意見を交換しあ

った。Tane は、シェイディングや、パウア・カラー〔彫刻に使用するパウア（アワビ）の貝殻のような光沢を色で表現する技術〕を勉強したいと筆者に語った。

この Tane と Clifford の場合、仕事をしてお金を得る必要があることも、Tattooist へ接近した動機の一つであった。彫師が急増しているニュージーランドの現状では、彫師にとって仕事の競合問題は深刻である。スタジオに「勤める」ことは、収入の安定につながる。若い彫師の中には、オーストラリアの親戚にモコを彫りにいく、オーストラリアの方が需要が高いと言う彫師もいた。若い彫師たちは、シェイディングやカラーといった技術を柔軟に取り入れ、独自のスタイルを模索している。

4 おわりに

マオリの人々は、力強くモコを復興し、現在、モコは「Tattoo」と呼ばれるグローバルなタトゥーやギャングのタトゥーとは異なる、マオリ文化としての地位を確立している。モコ復興は、失われた技術や知識を取り戻すというだけでなく、非マオリのタトゥー実践を Tattoo として想像し、それに相対するものとしてモコを再主張していく過程であった。こうして見たとき、これまでのコンタクト・ゾーンの議論〔Pratt 1992; 田中 2007〕でなされてきた表象や想像の議論は、たしかにここでも当てはまるように思える。

しかし、表象から目を離し、実践に目を映してみたとき、そこには多様な実践が存在する。自己の作り出した「他者」そして「自己」への想像と向き合いながらも、しばしば固定化される想像から離れ、モコは今、多様な形で実践されているのである。

注

- 1) 本論文の対象となるニュージーランドは、イギリスによる植民地化や同化政策の歴史を考慮すれば、支配・従属という Pratt の前提とした図式が当てはまるように思える。また、教育、健康、経済的な統計はマオリのおかれる社会的地位の低さを示している。しかし、現在のニュージーランドにおいて、マオリは白人（パケハ）に支配される存在であるとは必ずしも言えない。例えば、マオリが特権化されているという批判もしばしば見られる〔Borell, Gregory, McCreanor, Jensen & Moewaka Barnes 2009〕。さらに、モコと Tattoo の関係に関しては、モコの彫師たちから見れば、モコは「マオリ文化」として肯定されるものであり、Tattoo はギャングなど周縁的な存在と結びつくものである。そのため、「モコ」と「Tattoo」の接触を考察する際には、支配・従属、中心・周縁関係を単純に規定することはできない。
- 2) 外務省 HP 参照。
- 3) 総務省統計データ参照。
- 4) Statistic NZ 参照。
- 5) なお、人々の日常生活においてモコとタ・モコという語の区別は明確でない。人々はタ・モコという語をより頻繁に使用する傾向にあるが、これはモコが「孫」（マオリ語でモコもしくはモコプナ）の意味でより一般的に使用されるためであろう。芸術分野名としてもしばしば「タ・モコ」が使用されるが、本稿では煩雑さをさけるため「モコ」で統一、特に彫る行為に言及する場合のみ「タ・モコ」を使用した。
- 6) 特に復興期には、タ・モコはタ・モコ・ファカイロと呼ばれることがあった。現在ではタ・モ

- コがより一般的である。ファカイロは彫刻をさすマオリ語。
- 7) 彫師が集まって客にタトゥーをするイベント。主に入場料を払ったお客が会場を歩き回り、彫師にタトゥーを彫ってもらう。料金は彫師ごとに異なり、彫師に支払う。参加者がタトゥーを披露し、美しさを競うタトゥー・コンペティションなども行われる。ニュージーランドでも、様々な国から彫師が集まる大きなコンベンションが開催されることがある。
 - 8) Spiderweb Productions/NZ on Air/Te Mangai Paho 1997
 - 9) ニュージーランドの彫師たちは「ガン」とのみ呼ぶことが多い（まれに"Needle"という者もある）。しかし、あるアメリカ合衆国在住のタトゥー・コレクター（タトゥーを自身の身体に集める人々）によると、アメリカ合衆国では「タトゥー・マシン」と呼ぶのが一般的らしい。「『タトゥー・ガン』と呼ぶ彫師は時々いるが、『ガン』とは呼ばない、ガンが違うもの（銃）をさすから」と笑いながら語った。
 - 10) しかし、タトゥー鑿の復興に否定的な彫師たちもいる。
 - 11) デザインの個性性は、Tattoo とモコとの違いとしてしばしば言及される。
 - 12) ただし、1980年代、90年代の復興初期には「ステンシル」の技術が多く使用された可能性がある。過去の映像（1995年テレビ放送）を見ていた際、復興の立役者として著名なある彫師が「ステンシル」を行っていることに気がついた筆者がある彫師にそれを指摘すると、「当時は自信がなかったから。今は行わない」（2010.7.26）と答えた。
 - 13) Kuwahara [2005] や Allen [2010] によれば、ニュージーランド以外のポリネシア地域では、汎ポリネシア・スタイルを行うことが一般的である。それはマオリやタヒチ、マルケサスやサモアなどのスタイルが混ざり合ったものであり、「かれらは、こうした（ポリネシアン）スタイルを使うことができると考えている。なぜならかれらはすべて『ポリネシアン』だからだ」[Kuwahara 2005:154]。しかし、ニュージーランドの場合、こうした他のポリネシア地域のスタイルはモコとははっきり区別される。ただし、スタジオを持つ彫師たちは、汎ポリネシアのデザインを行うことが比較的多いようである。特に復興を主導したとされる高齢の「Tā Moko Artist」が汎ポリネシア・スタイルを行うことは少ない。彫師である Haki は、自身にマオリのほか、サモア人とフィジー人の血も入っていることから、「自分は他の太平洋のスタイルを行う。それは自分の系譜ゆえだ。これが他の「Tā Moko Artist」にはない自分の特徴だ」（2010.07.24）と述べた。彼は比較的若い世代に属し、マオリ芸術のバックグラウンドを持つ。また、スタジオでモコを行っていたこともある。若いが著名な彫師の一人であり、「Tā Moko Artist」と自称する。
 - 14) 「Tattooist」とは、特に復興初期の「Tā Moko Artist」たちが自らと「かれら」を意図的に区別する用語である。従って、「Tattooist」たちが必ずしも自らをこのように自称しているわけではない。
 - 15) ただし、Tā Moko Artist たちの技術が、必ずしも Tattooist たちに劣っているわけではない。
 - 16) 若い彫師たちの多くは、自らを「Tā Moko Artist」と呼んでいるが、高齢の Tā Moko Artist たちのような政治性は必ずしも感じられない。ある若い彫師は、筆者が「復興について聞きたい」とインタビューを始めると、「うーん、復興かあ。考えたことなかった……」と悩み始めた。復興を主導していた高齢の「Tā Moko Artist」たちには考えられない反応に、筆者は驚かされたのであった。

参考文献

- 伊藤泰信 2007 『先住民の知識人類学——ニュージーランド＝マオリの知と社会に関するエスノグラフィ』世界思想社。
- 田川とも子 2009 「文身とタトゥー」成実弘至編『コスプレする社会——サブカルチャーの身体文化』せりか書房, pp. 172-195。
- 田中雅一 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』1:31-43。
- 内藤暁子 1999 「都市のマオリ——その歴史と現状」青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市——人類

学の新しい地平』青木書店, pp. 41-58。

秦 玲子 2010 「マオリの伝統的タトゥー「モコ」と文化復興」『タトゥー・バースト』9月号:80-83。

——— 2011 「ニュージーランド・マオリのタトゥー, モコの断絶と復興——彫師の語りを中心に」『日本ニュージーランド学会誌』18:53-66。

Allen, Tricia 2010 *The Polynesian Tattoo Today*. Honolulu: Mutual Pub.

Borell, Belinda A. E., Amanda S. Gregory, Tim N. McCreanor, Victoria G. L. Jensen & Helen E. Moewaka Barnes 2009 "It's Hard at the Top but It's a Whole Lot Easier than Being at the Bottom": The Role of Privilege in Understanding Disparities in Aotearoa/New Zealand. *Race/Ethnicity* 3(1):29-50.

King, Michael & Marti Friedlander 2008 (1972) *Moko : Māori Tattooing in the 20th Century*. Auckland: David Bateman.

Kuwahara, Makiko 2005 *Tattoo : An Anthropology*. Oxford: Berg.

Nikora, Linda Waimarie, Mohi Rua & Ngahua Te Awekotuku 2005 Wearing Moko: Maori Facial Marking in Today's World. In Nicholas Thomas, Anna Cole & Bronwen Douglas eds. *Tattoo : Bodies, Art and Exchange in the Pacific and the West*. London: Reaktion Books, pp. 191-203.

Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge.

Anon. 2002 TA MOKO v TATTOO/Moko Whakairo. *Pikiao Panui* 55:22.

インターネット資料

外務省 HP

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nz/data.html> 2010年12月14日閲覧。

総務省統計データ

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/index.htm> 2010年12月14日閲覧。

Statistic NZ

<http://wdmzpub01.stats.govt.nz/wds/TableViewer/tableView.aspx> 2010年12月14日閲覧。